フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック

飯　野　和　夫

はじめに

ミシェル・フーコー（1926–1984）は、感覚論を哲学として飛躍させたコンディヤック（1715–1780）について、『臨床医学の誕生』（1963）[(1)]と『言葉と物』（1966）[(2)]という初期の二著作で数多く言及している。本論文ではこの内、『臨床医学の誕生』におけるコンディヤックへの言及の内容を検討したい。この書でフーコーは、18世紀末葉以降のフランスを中心とするヨーロッパにおける、誕生期の臨床医学の発展の様態を跡付けた。その中で、コンディヤックの「論理学」は、「臨床医学に対して認識論のモデルの役目を果たした」（F. p. 117, J. p. 164 [p. 200]）[(3)]と評価されている。『臨床医学の誕生』はコンディヤックを導きの糸として展開されていると言っても過言ではない。この書においてフーコーがコンディヤックを具体的にどう評価していたかを明らかにしたい。なお、この書で引用されるコンディヤックの著作は『人間知識起源論』（以下『起源論』と略記する場合がある）（1746）に限定され、他の著作は間接的にふれられるにとどまる[(4)]。また、フーコーによるコンディヤックの評価を検討することを目的とする本論文では、コンディヤックの側での関連する問題は十分に論じることができない。この点については、機会をあらためたいと思う。

Ⅰ．初期フーコーとコンディヤック

フーコーによるコンディヤックへの言及を検討する前に、コンディヤックが執筆活動を行った18世紀中葉の時代について、フーコーが一般的にどのように考えていたかを確認しておこう。フーコーが『言葉と物』で展開した主張はよく知られている。すなわち、彼によれば、西欧の知の歴史において、順に、ルネサンス時代、「古典主義時代」（ほぼ17–18世紀に相当）、そして、ほぼ19世紀以降に相当する狭義の近代といった時代は、それぞれ知の基本的枠組み（エピステーメー）を異にしている。そして、フーコーはこの著作で、特に古典主義時代と近代の知の基本的枠組みを探り、来るべき時代の知を展望しようとしたのであった。

彼は、『言葉と物』第一部第三章「表象すること Représenter」の第二節「秩序 L'ordre」において、「古典主義時代」について次のように語っている。

古典主義時代のエピステーメーにとって基本的なものは、(…) 18世紀末まで恒常的で損なわれることなく続くマテシス mathesis〔普遍学〕との関係である。(…) マテシスの探究との相関関係において、これまで形成されなかったいくつかの経験的領域の出現が見られる。(…) それらの経験的領域は、いずれも秩序に関する可能な学問〔マテシス〕を下地として成立している。それらの領域は「分析」に従属するが、それらの領域の特徴的な道具立ては代数的方法なのではなく、記号の体系ということである。このようにして、語、諸存在、必要 besoins のそれぞれの領域における秩序の学である、一般文法 la grammaire générale、博物学 l'histoire naturelle、富の分析 l'analyse des richesses が現れた。(F. p. 71, J. p. 82)[1]

ここでフーコーは「マテシス mathesis」と言っているが、これは mathesis universalis のことであり、ふつう普遍学と和訳される西欧の古典主義時代の学問理念のことである。この理念は、諸学に有効な「秩序と数量関係の学」というデカルトの理想が起源となっていると一般に考えられている。ただし、フーコーは、この実現されるべき学問理念の特徴を「記号の体系」という点に見ていることになる。

以上は、『言葉と物』において展開される主張であり、『臨床医学の誕生』ではこのような明確な図式化はなされない。ただし、両著は刊行時期に3年の差があるものの、同時期に構想・執筆されていたのであり[2]、『臨床医学の誕生』の執筆時のフーコーも、上のような見方を少なくとも潜勢的には持っていたと考えられる。さらには、『臨床医学の誕生』は、『言葉と物』で「古典主義時代」と（狭義の）近代として区別される二つの時期の間の移行の一つの具体的なあり方、臨床医学の場面におけるあり方を明らかにしていると考えることもできよう。

『臨床医学の誕生』の内容を検討するに際して、あらかじめ注意しておくべき点がある。コンディヤックの『起源論』が刊行されたのは1746年だが、フーコーが『起源論』に言及するのは、あくまでも臨床医学の誕生・発展との関係においてのことである。彼がその論述において念頭に置いている時代は、『起源論』の執筆時期よりも大分遅く、おおよそ1780年代であると思われる。フーコーは誕生期の臨床医学を「コンディヤックやその後継者たちと同時代」(J. p. 148［p. 182］, F. p. 105）と見なすこともあるが、現実には、コンディヤックは1770年代中頃に『文法』や『交易と政府』を刊行し、1780年に『論理学』を刊行した後、同じ1780年には他界する。あらかじめこの点を確認しておきたい。

『臨床医学の誕生』におけるコンディヤックへの言及は、主に第六章「記号と症例 des signes et des cas」[3]、および第七章「見ること、知ること voir, savoir」でなされる。こうした箇所でフーコーは、コンディヤックの『人間知識起源論』(1746）から『論理学』(1780）や『計算の言語』(死後出版 1798）へと至る認識理論、言語理論の展開に言及する。しかし、実際に引用や出典指示がなされる著作は、コンディヤックの最初の哲学的著作である『人間知識起源論』だけである。『起源論』は、ロックの『人間知性論』(1690）を批判的に発展させて感覚

論哲学の出発点を印した重要著作として知られている。コンディヤックにかかわるフーコーの論旨は、概略次のように展開される。コンディヤックは、事象の生成過程 genèse を分析し記述することによって、事象を理解しようとした[(4)]。彼は対象の理解のために、いわば数学的な分析方法の検討も続けた。ただし、後者の方向は、実際の臨床医学の発展の方向とは必ずしも合致しなかった（F. p. 117, p. 115, J. p. 164［p. 201］, p. 161–162［p. 197–198］）。以下、フーコーの考察を具体的に跡づけよう。

Ⅱ．コンディヤックの分析理論と臨床医学

コンディヤックは、『臨床医学の誕生』の第六章「記号と症例 des signes et des cas」以降でフーコーによって言及されるようになる。この書では、「まなざし」や「可視性」といった視覚にかかわる表現が多用されるが、人間の認識や理解が視覚になぞらえられている。フーコーは次のように語っている。

> 可視性 visibilité の深い諸構造を読み取るべきである。その可視性においては、場とまなざしとが知のコード codes de savoir によって互いに結びついている。そうしたコードを主な二つの形の下で検討しよう。つまり、〔病気の〕記号の言語的構造 la structure linguistique du signe と症例の確率的構造 la structure aléatoire du cas である。（F. p. 89, J. p. 128–129［p. 159］）

可視性（理解可能性）の構造を読みとることが問題だとされ、フーコーはその構造を、1.「病気の記号の言語的構造」と 2.「症例の確率的構造」とに分類した。この分類の意味するところは先で検討することになろう。いささか煩瑣と感じられることをいとわずに、順にフーコーの展開を追おう。

1．病気の記号の言語的構造 la structure linguistique du signe (F. p. 89–, J. p. 129–［p. 159–］)。医師のまなざしの出現

病気に関係して、症状 symptôme とは病気の可視的なあらわれを指す。他方、記号 signe ――脈拍、（爪などの）色、発作など――は、それ自体では不可視なものを通して、病気の予後、既往歴及び診断を告げる（F. p. 90, J. p. 129–130［p. 160］）。しかし、こうした「記号と症状の場に医師のまなざしが出現した」とされる。フーコーは言う。

> 〔医師のまなざしがもつ〕構成する権利 droits constituants を認めれば、記号と症状の間の絶対的な区別は消滅する。この権利を認めればまた、これ以降、意味するもの（記号と症状）

は、意味されるものに対して完全に透明になるよう要請される。意味されるものは、隠されることもなく余すところもなく、それ自体の現実において現れるよう要請される。また、意味されるものの存在――病気の本質 coeur ――が意味するものの理解可能な統語法 syntaxe の中ですべて語りつくされるよう要請されるのである。(F. p. 90, J. p. 130［p. 161］)

医師のまなざしがもつという「構成する権利」における「構成」は現実には、観察に基づく対象の「再構成」と言うべきであろう。また、ここで語られる「要請」は必ず実現するとは限るまい。いずれにせよ、古典主義時代の知の基本的枠組みの中に、医師の、一つの積極的なまなざしが登場した。フーコーによれば、この時代には「人間」という観念はいまだ未成熟であったから、このまなざしは「構成する権利」を持ち、一気に〈意味するもの―意味されるもの〉の普遍的な知の世界に通じると考えられたのではないか。なお、本書で syntaxe（英語 syntax）という語は、「意味の単位としての単語を組み合わせて文を作る規則の総体」といった広い意味で使われていると思われる。そのため本論文ではこれを「統語法」と訳す。

結論を急がず順に見ていこう。フーコーは次いで、この医師のまなざしの出現という新たな事態を 3 点について論じていく（F. p. 90–, J. p. 131–［p. 161–］)。(1)

(1) 症状から記号へ(2)

症状は、意味し、意味される、意味作用の関係の中に置かれている（F. p. 91, J. p. 132［p. 162–163］)。症状は記号となる。「しかし」とフーコーは言う。記号（あるいは言語）が成立する前提条件が整っていなくてはならない。

しかし、(それ自体によって、あるいは病気によって）意味されるものとして捉えられるとき、症状がその意味を受け取るのはもっぱら、もっと古くて、症状の領域に属さないある行為 acte からである。この行為は症状を全体化し、切り離す。つまり、あらかじめ症状を記号へと変化させたのである（F. p. 91, J. p. 132［p. 163］)。

わかりにくい一節だが、ここでフーコーはコンディヤックの名前を出すことになる。コンディヤックは『人間知識起源論』において、自然的記号 signe naturel を利用した動作言語 langage d'action について語っていた(3)。フーコーによれば、症状はこの動作言語と似た位置にある。この引用箇所の少し先を、晦渋な文章ではあるが少しずつ引用していくことにしよう。

(…）症状は動作言語と同様に一つの自然性〔本性〕(une nature）の一般運動の中に取り込まれている（être pris)。症状の発現力（force de manifestation）は原初的であり、本来的に（naturellement）与えられているが、このことは、言語のあの最初の形態〔動作言語〕をも

たらす「本能」が原初的であって、本来的に与えられているのと同様である[(4)]。（F. p. 92, J. p. 132［p. 163］）

病気の症状と、人為的音声言語に先立つ動作言語が似たような位置にあるという主張はわかりにくい。フーコーはここで注を立て、コンディヤックの『起源論』を参照するよう求める。参照先（EOC II–I–I–2）で、コンディヤックは、太初の人間が動作言語を獲得するさまを次のように述べている（フーコーが指示する頁の前の頁の末尾から引用する、「／」は頁が改まる位置を示す）。

「§2（…）たとえば、欲求のせいで必要となったものがないために苦しんでいた人は、叫び声を上げるだけではいられなかった。それを手に入れようとさまざまに努力し、／頭、腕、そして体のあらゆる部分を揺り動かすのだった。もう一人の人はこの光景に心を動かされて、〔相手が求めている〕その当のものにじっと視線を注ぎ、まだ自分で説明できない感情が自分の心の中に生じるのを感じ、この哀れな人が苦しむのを見て苦しみを感じたのである。この時から、彼はその哀れな人を楽にしてやりたいと思うようになり、自分でできる範囲でこの印象 impression に従うようになった。こうして、ただ本能 instinct だけによって、これらの人々は助けを求め合い、与え合ったのである。（…）反省はまだそこに関与できなかった。（…）二人とも、自分たちを一層駆り立てる欲求 besoin に従って行動したのである。」（EOC II–I–I–2, 強調引用者）

フーコーはコンディヤックの論述から「本能」という術語を取り出したことになる。フーコーから続きの部分を次に引用するが、そこではさらに「印象」という術語もコンディヤックを受けて使われる。また、次の引用中の「行為」という術語は、二つ前のフーコーからの引用に現れた「行為」と対応していよう。

症状は発現状態（état manifeste）にある病気であり、動作言語が活性状態（vivacité）にある印象（impression）であるのと同様である。この活発さは印象を引き延ばし、維持し、裏返して〔動作言語という〕一つの外的形態をとらせる。この外的形態は印象の内的真実と同形（de même grain）なのである。しかし、この直接的言語〔動作言語〕が他人のまなざしにとって意味を持つようになることは、よそから来るある行為（acte）が介入しなくては概念上不可能である。ところでコンディヤックは、話し言葉はもたないものの直接的運動性をもつ二人の人物を想定し、彼らに意識[(5)]を付与することで、この〔よそから来る〕行為の働き（jeu）をあらかじめ自分のために確保したのである（原注）。（F. p. 92, J. p. 132–133［p. 163–164］）

こうして、問題となっている「行為」は記号あるいは言語を実現するための前提として想定さ

れるものであることがわかる。この引用部分の最後でフーコーは注を立て、『起源論』を参照するよう求める。原注で指示された箇所、すなわち上で参照した箇所と同じ章の一つ前のパラグラフで、コンディヤックは次のように述べている。

「§1 今話した二人の子供がばらばらに離れて生きていた限り、彼らの魂の働きで使われるものは、次のようなものに限られていた。まずは知覚と意識の使用である。これらの使用はおよそ人が目覚めている限り絶えることがない。(…)」(EOC II–I–I–1)

フーコーが上の引用箇所で、コンディヤックにおける言語実現の前提として「意識」を挙げたのは、コンディヤックのこの叙述に依拠している(6)。フーコーは続ける。

> 一方、彼〔コンディヤック〕は、この行為を本能の伝達的で同時的な諸運動の中に組み入れた(insérer)が、そのことで、この行為の独自で至上の本性を隠してしまった(原注)。(F. p. 92, J. p. 133 [p. 164])

フーコーがこの引用の最後に注を立てて参照を求めている箇所、つまり同じ章の §3でコンディヤックは次のように述べている。

「§3 しかし、今見たところと同様の〔二人の人が互いに助け合う〕状況がしばしば繰り返されると、彼らはついには情念の叫び声や身体のさまざまな動作〔身ぶり action〕に、そこにこうもはっきりと表現されていた〔内面的な〕知覚を結びつけるのに慣れる(s'acoutumer à)ようになった。彼らがこれらの記号に慣れ親しむ(se familiariser avec)ほど、彼らはそれら〔の記号〕を思うままに呼び起こすことができるようになった。」(EOC II–I–I–3)

フーコーがなぜこの箇所を引いたのかはわかりにくい。フーコーは、コンディヤックがここで語る「慣れ」が「本能」の延長上にあり、結局「本能」の一部をなす、と見なしたようだ。そう解釈する中で、記号を実現する行為の「至上の本性」、したがって記号それ自体の「至上の本性」も、「本能」のあいまいな概念の中に「隠されて」しまったと考えたのではないか。フーコーはさらに続ける。

> 動作言語を話し言葉の起源に置くとき、コンディヤックは、一方で話し言葉からあらゆる具体的形象(構文、単語、そして音声さえも)を取り除きながら、話す主体の一つ一つの〔話す〕行為に内在するものとしての言語的な構造を、動作言語にこっそり滑り込ませた(glisser)のである。以後、コンディヤックは、動作言語から言語ただそれだけを取り出すことができるようになった。というのも、言語の可能性をあらかじめ動作言語に組み込んで(engager)いたからである。臨床医学における、症状という動作言語〔に相当するもの〕と、記号の明らかに言語的な構造との間の関係についても同様である。(F. p. 92, J. p. 133 [p. 164])

この箇所で現れる「行為」は、これまでに現れた「行為」とは区別されよう。これまでに現れた「行為」は、この引用での表現を借りれば、むしろ「言語的な構造」あるいは「言語の可能性」をもたらすものなのではないか。

以上、晦渋なくだりであったが、内容を図示すれば、次のようになろう。

動作言語（活性状態）／症状（発現状態）（外的形態）
↑
（本能（活性）／発現力）
|
内的真実としての印象／病気
至上の本性、言語的構造

印象・病気といった「内的真実」は、「本能」や「発現力」を通して、動作言語・症状という外的形態をとる。この展開がなされるためには、「よそから来るある行為」があらかじめ必要となろう。その行為とは、「内的真実」の中に、「至上の本性」を帯びた「言語的構造」、「言語の可能性」をもたらすこと、であろう。本節〔II–1–(1)〕の最初〔本論文 p. 4〕のフーコーからの引用では、症状が意味をもつためにも「ある行為」が必要だとされ、その後、動作言語が意味を持つためにも「よそから来るある行為」が必要であるとされていた。一つ前の引用のすぐ先の、病気についての次の指摘も、表現は異なるが、同様の事柄を指しているように思われる。

> 物質的現実においては、記号は症状そのものと同一である。つまり、症状は記号のための不可欠な形態的な支え support morphologique なのである。（…）しかし、記号が記号たるゆえんは、症状に由来するのではなく、別のところから来るある活動 activité による。（F. p. 92–93, J. p. 133［p. 164–165］）

以上に見たように、フーコーは、コンディヤックを例に引いて、動作言語にはすでに言語的構造が想定されていたとした。同様に、臨床医たちは、新たな「医師のまなざし」をもって、症状に言語的構造――少なくとも広い意味での言語的構造――を想定したとされているのではなかろうか。病気の症状は言語的構造をもつがゆえに、その症状は記号として、病気を指し示す意味作用をもつものとして発現する、と言いたいのであろうか。しかし、現にコミュニケーションの手段として人間同士の間に成立する動作言語に言語的構造を見てとることと、病気が示す症状にも言語的構造を見てとることを、同様に論じることには無理があると感じざるをえない。フーコー自身は明言しないものの、両者を見るまなざしの同型性を指摘することでフーコーは、この時期の臨床医が病気の症状を見るまなざしに過度の権限を与えていた、と指摘し

たいのかもしれない。

(2) 分析[7]**——「よくできた言語」**（F. p. 92–, J. p. 133–［p. 164–］）

医師のまなざしの出現という新たな事態に直面して、フーコーが問題とする 2 点目を見よう。このまなざし、つまり症状を見る医師の意識が、実際の場面で症状を記号に変える（記号と見なす）ことになる（F. p. 92–, J. p. 133–）。[8]

> 症状が記号となるのは、差異、同時性あるいは継起性、そして頻度などを感知するまなざしの下でのことである。この作業は自ずと弁別的であり、全体と記憶を重んじ、算術的でもある。したがって、この行為 acte は、ただ一つの動きによって、要素を諸要素の相互連関と結びつける。この点において、この行為は結局、コンディヤックの「分析」が医学的知覚において実地適用 mise en pratique されたものでしかない。こちらでもあちらでも問題はただ「私たちのさまざまな観念を組み立てたり分解したりし、そこから諸観念をさまざまに比較したり、それによって諸観念相互の関係や諸観念から生じうる新しい観念を発見すること」なのではなかろうか。（F. p. 93–94, J. p. 134–135［p. 166］）

この引用の最後でフーコーが引用しているのは、コンディヤックによる「分析という働き」の定義であり、フーコー自身が原注を立てて指示するとおり、『起源論』第一篇第二部「魂のさまざまな働きの分析および発生過程」第七章「さまざまな学問的原理の起源についての余談、および分析する働きについて」の一節である（EOC I–II–VII–66）。フーコーはこれまでも『起源論』の参照すべき箇所は指示してきたが、実際に引用をするのはこれが初めてになる。コンディヤックのこの箇所での「分析」の定義は重要であり有名でもあるので、もう少し広く引用し直しておこう（フーコーが引用した部分、および少し先で引用することになる部分は破線で示す）。

「分析はただ、私たちのさまざまな観念を組み立てたり分解したりし、そこから諸観念をさまざまに比較したり、それによって諸観念相互の関係や諸観念から生じうる新しい観念を発見することである。この分析は発見の真の秘密である。というのもそれは、私たちをいつも事物の起源 origine des choses にまで遡らせてくれるからである。（…）分析が真理を探究するのは、決して一般命題の助けを借りてではない。常に一種の計算によって行うのである。つまり、概念 notions を組み立てたり分解したりして、目指す発見に最も適した仕方でそれらの概念を比較するのである。ふつう論争を増やすことにしかならないさまざまな定義によってでもなく、おのおのの観念の生成を説明することによってなのである」（EOC I–II–VII–66）[9]。

分析の方法とは、事物をその「起源」から（すなわち根本的に）把握するために、「観念相互の関係や（…）新しい観念を発見すること」、そうした諸観念の「生成」を説明できるよう

に進めることである。ここで観念とされるものは、知覚の像ではなく、「分解」、「組み立て」の対象となる厳密な一般的・抽象的観念、あるいは概念であろう。この分析の過程で行われる観念の「組み立て」、「分解」、「比較」は「計算」にもたとえられる。このコンディヤックの一節、そして諸観念の「生成」と「計算」という術語はフランスの学術界に強い影響を及ぼしていくことになろう。なお、ここで「生成」という語は観念の生成について使われているが、この観念の生成は、起源からの事物の生成に対応しているであろう。実際、コンディヤックは別の箇所で次のように語っている。「分析においては、事物の生成そのものを人は追究せざるをえない。それゆえ分析が正しくなされるならば、その分析には必ず多くの人々の賛同が得られるであろう」（EOC I–III–10）[10]。

フーコーは、こうしたコンディヤックの「分析」と同じ方法が、病気の症状に適用されたとする。実際、事物との関係も含め、次のように語られる。

> 〔コンディヤックの〕分析と臨床医学的まなざしはさらに次の共通の特徴をもつ。すなわち、〔諸観念の〕組み立てと分解は、自然的秩序 ordre naturel そのものに他ならないある構成 ordonnance を明るみに出すためだけに行われるということである。両者の技法は、原初のもの originaire を復元しようとする行為においてだけ働くのである。「この分析は発見の真の秘密である。というのもそれは、私たちをいつも事物の起源にまで遡らせてくれるからである。」[11]（F. p. 94, J. p. 135［p. 166］）

分析的まなざしは事物の本源的秩序を復元しようとする。さて、フーコーはそのまま続けて、特に臨床医学について「記号」や「網羅的な解読の可能性」といった問題にふれる。

> 臨床医学にとって、この起源とは、諸症状の自然的秩序であり、諸症状の継起あるいは相互決定の形態である。（…）記号は症状そのものだが、起源の真実 vérité d'origine における症状なのである。最後に、臨床医学の経験の地平に、あいまいさも余すところもない網羅的な解読 lecture exhaustive の可能性が現れてくる。ある医師の知識が「最高の完成の域に達して」いれば、この医師にとって「あらゆる症状は記号になりうるであろう」[12]。つまり、あらゆる病的な現れ manifestations が明晰で秩序立ったことばを語るだろう。かくして、コンディヤックのいう科学的認識の澄んだ完成した形、「よくできた言語 langue bien faite」に到達することだろう。（F. p. 94, J. p. 135［p. 166–167］）（Cf. F. p. 115, J. p. 161［p. 197］）

症状を記号として「網羅的」に「解読」していく中で、記号体系は内実を伴うこととなり、コンディヤックのいう科学的知識の完成形、「よくできた言語 langue bien faite」へ到達するだろうとされている。

「よくできた言語」は、コンディヤックが『論理学――考える技術の初歩』(1780) 第二部第五章「抽象的で一般的な観念についての考察。推論の技術はいかにしてよくできた言語に還元されるか」で語った知識の理想像である(13)。この章でコンディヤックは次のように語っている。科学を含む私たちの思考は「明晰」で「正確」な「抽象的一般的観念 idée abstraite et générale」によって組み立てられなければならない。

「そうした観念の明晰さと正確さはひとえに、私たちがいろいろなクラス〔部類〕に付与した名称 dénomination(s) の間の秩序に依存している。したがって、こうした種類の観念を明確化する déterminer 手段は一つしかない。つまり、言語をうまく作ることである」(F. p. 401R, J. p. 155)。

当然、事物の諸関係に基づいてのことだが、私たちは適切に秩序立てられた名称の体系を構築すべきであり、その全体が「よくできた言語」ということになろう。

これでもまだ「よくできた言語」の性格はわかりにくいかもしれない。コンディヤックは、『論理学』第二部第七章で、代数を例示しつつ推論について次のように語っている。

「〔等号を介した数式の証明がそうであるように〕こうした同一性 identité が推論のすべての明証性を作り出す。／推論が言葉 mots で展開されるときも、やはりその明証性は、ある判断から次の判断へ移るときにはっきり見てとれる同一性に存する。(…) 代数学の記号で表現されるときには、同一性を見てとるのが一層容易なのである。／ (…) 同一性 identité が示されさえすれば、推論が厳格な証明であると保証される。(…) どんな学問であれ、よくできた言語で語るなら、すべては同じ正確さを持つはずである。私たちは本書〔『論理学』〕の〔感覚論哲学を簡潔に再論した〕第一部で、形而上学〔観念と魂の諸能力についての議論〕をそうしたやり方で扱った。たとえば私たちは魂の諸能力の生成について説明したが、それはただ、すべての魂の能力は感覚する能力と同一であると見てとったからなのである。私たちは言葉 mots で推論したが、〔代数学における〕文字 lettres〔記号〕を使った推論と同じくらい厳格に証明したのである」(『論理学』第二部第七章、F. p. 408R–409L, J. p. 185–186)。

ここでコンディヤックははっきりと、推論においては、判断から判断へと同一性をたどること (代数学の言語である数式であれば、等号で結ばれる関係をたどること) が肝要であること、そうすることによって明証的な厳格な推論が成り立つことを主張している(14)。コンディヤックによれば、彼はその感覚論哲学を――少なくとも『論理学』第一部におけるその再論を――「よくできた言語」を用いて展開し、感覚能力から魂の諸能力がすべて発展すると証明した、という。なお、新しい言葉 (語) の選定については、コンディヤックは次のように言っている。「よくできた分析が実際に新しい観念を与えたときにだけ、類比に従って新しい言葉を探した」ならば「言語は厳密なままで、その範囲はより広がっただろう」(『論理学』第二部第三章、F. p. 399L, J. p. 142)。

フーコーの文脈に戻るなら、結局、臨床医学の分野でも、適切な名称 (記号) の体系、「よ

くできた言語」が構築されなければならないと考えられた、とフーコーは考えるのである。

(3)　継起的秩序の復元（F. p. 94–, J. p. 135–［p. 167–］）[15]

臨床医学において「分析」への信頼は厚かったようだ。フーコーは指摘する。

> 病気が諸症状の中に余すところなく現存するのに対応して、病気の存在 l'être pathologique は記述的言語の統語法に対して何の障碍もなく透明となる。病気の構造と病気をとらえる cerner 言語的形態とは根本的に同形とされたのである。（F. p. 94–95, J. p. 136［p. 167–168］）

かつて、古典主義時代のただ中の「種の医学 médecine des espèces」[16]においては、病気の本質とその記述は、病気を種ごとに分類した表〔図式、タブロー〕を介在させて対応した。しかし、古典主義時代末期の臨床医学においては、「見られることと語られること」は、あるいは観察され分析された事象と言語とは、「病気の明らかな真実の中で一挙に相通じる」と考えられたという（J. p. 136［p. 168］, F. p. 95）。フーコーはここで再度コンディヤックに言及する。

> 臨床医学は、知覚行為と言語の要素との関係――コンディヤックにおいて根本的な関係――を活用する。哲学者の「分析」と同様に、臨床医による記述は、〔知覚を含む〕意識の働きと記号の間の自然的関係 relation naturelle によってもたらされるものを表に出す proférer。この再現 reprise の中で、自然なつながり enchaînements naturels の秩序が現れ出る。言語の統語法は、時間の内にあるさまざまな論理的必然を乱すどころか、そうしたさまざまな必然を、それらの最も根源的な分節 articulation[17]において復元するのである。「分析とは……（F. p. 95, J. p. 136［p. 168］）

コンディヤックは確かに知覚対象を、言語を手段として「分析」することを論じた。とはいえ、わかりにくい一節である。この箇所に続けて、フーコーは、フィリップ・ピネルが『哲学的疾病学 *Nosographie philosophique*』（1798年）で、コンディヤックの『論理学』（1780）第一部第二章（「知識を獲得する唯一の方法は分析である、いかにして私たちは分析という方法を自然そのものから学ぶか」）から引用した内容を孫引きして続ける。（以下、フーコーによる孫引き部分は破線を付して示すが、それだけでは簡潔に過ぎて意味を取りにくいので、〔　〕内に『論理学』における文脈を補う。）

> 「分析とは、ある対象のさまざまな性質を継起的〔時間的〕秩序において dans un ordre successif 観察し、それらの性質が実在においてもつ同時的な秩序を精神においてもたせることにほかならない。〔そしてこれは、自然が私たち全員にやらせることである。一般に分析

という方法を知っているのは哲学者だけだと思われているが、実は誰もが知っていることである。〕(…)〔対象を観察する場合、まなざしが従うべき〕秩序はどのようなものだろうか？自然自体が教えてくれる。それは自然がさまざまな対象を提示してくる秩序である。〔対象の中には、とりわけまなざしに呼びかけてくるものがある。それらは一層目立ち、支配的である。(…) これらが、私たちが最初に観察する対象なのである。〕」[18] (F. p. 95, J. p. 136［p. 168］)

引用（孫引き）に続けてフーコーは言う。

真理の秩序は言語の秩序と一つのものである。というのも、両者は時間を、その必然的で言表可能な形式、つまり言説的な形式に復元するからである。(F. p. 95, J. p. 136–137)

結局、上のわかりにくい一節で語られていたことも、私たちが、分析によって、時間の内にある事象の秩序を、「真理の秩序」、「言語の秩序」として定着させる、ということであろう[19] [20]。

以上、フーコーが可視性（理解可能性）の構造とするもののうち、1.「病気の記号の言語的構造」とされるものを見たことになる。ここでは病気の記号が成立する前提条件として、病気が言語と同形の構造をもつと想定されたことが指摘され、他方、実際面では「分析」によってその構造の復元が図られたことが指摘された。次に、2.「症例の確率的構造」とされるものを見よう。

2．症例の確率的構造 la structure aléatoire du cas (F. p. 96–, J. p. 138–［p. 170–］)

フーコーは臨床医たちの著作を読み込みながら考察を進める。かつて18世紀の中葉においては、医学は「不確実な認識」であった（F. p. 96, J. p. 138［p. 170］)。しかし、今問題としている18世紀末には、「不確実性は、分析によって、いくつかの分離しうる確実度 degrés de certitude の総計として扱うことができ、こうした確実度は厳密に計算できる」ということが発見されたという（F. p. 97, J. p. 138［p. 171］)。しかし、近代的な病院の誕生期であったこの時期には、確率計算が適応できるような病理学的事実の調査はいまだ不可能であった。結局、「症例 cas を知覚する技術的な枠組み」として、以下のようないくつかの契機が生まれたという。

(1) 要素の組み合わせによる複雑さ[21]

18世紀末に至ると、経験についての考え方、つまり「知覚の枠組み」に変化が生じた（J. p. 141［p. 173］, F. p. 98–99)。それまでは、経験を離れて、一般的本質こそ単純であると考えられていた。ところが、フーコーによれば、今や「単純さは、一般的本質の中ではなく、(…)

際限なく反復して現れる少数の要素に見出されるようになった」（F. p. 99, J. p. 141［p. 174］）。これは「コンディヤックのものと同じタイプの経験の定義」であるとフーコーは言っている。つまりは、思弁的な発想から経験論的・帰納的な発想への重心の移動があったということであろう。フーコーによれば、臨床医学の場面で発熱を例にとれば、了解の原理 principe d'intelligibilité となるものは、発熱を構成するために不可欠な少数の要素であることになる。単純な形式 formes simples の組み合わせが経験の多様性を作るのである。

個々の症例は複雑さを呈するが、もはや制御できない変化のせいにすべきではない（その場合、捨象と抽象によってしか真実を解読できなくなる）（F. p. 99, J. p. 142［p. 174–175］）。個々の症例の複雑さは、要素の組み合わせの原理に従って分析すれば把握することができるはずである。フーコーは次のように言う。

> 認識することは、自然がものを組み合わせる associer 際の動きを復元することであろう。この意味で、生命に対する認識と生命それ自体は、生成の同じ諸法則に従っているのである。（F. p. 99, J. p. 142［p. 175］）

上に見たように（本論文 p. 9）、コンディヤック自身、「分析においては、i. 事物の生成そのものを人は追究せざるをえない」としていた（EOC I–III–10）。フーコーもここで、事物の側（ここでは自然あるいは生命）にも、要素の「組み合わせ」の動きや「生成」の動きを想定し、人はそうした事物の運動の法則を精神において「復元」することで、認識をするとしている。さて、フーコーは症例を知覚ないし認識する契機をさらに挙げているので簡単に見ておこう。

(2)　類比（アナロジー）の原理[22]——類比は種の医学の時代から用いられていたが、症例間の形態的類比を問題としていた。18世紀末の臨床医学における類比は諸要素間の関係の同形性 isomorphisme である。つまり機能や障害に存する諸関係の類比が、症状が同じものであることを示すのである（F. p. 99–, J. p. 142–［p. 175］）。なお、コンディヤックも『論理学』第 2 部第 2 章において、分析や「よくできた言語」との関係において類比について論じている（F. p. 397R–398L, p. 399L, J. p. 135, p. 142）。しかし、フーコーはここではコンディヤックにはふれていない。

(3)　頻度に対する知覚——医学的な確実性は、多くの症例を集めることによって形成されると認識されるようになった。「医学の知覚野はもはや種の〔分類学的な〕場ではなく、諸事件の領域となった」。しかし、上で見たように、当時、現実には十分な数の症例を集めることはできなかった。（F. p. 101–, J. p. 144–［p. 177–］）

(4)　確実度の計算——一般に認識の確実度を高めようという意図があった。しかし、ii. 事実の系列を対象にして反復を問題にするのか、i. 記号や症状や現象の総体を対象にして整合性を

求めるのかについて迷いがあったとされる。(F. p. 103–, J. p. 146– [p. 180])

こうした誕生期の臨床医学は、フーコーによって、大きくは「コンディヤックやその後継者たちと同時代」の存在として捉えられていた。それは、コンディヤックが唱えた「分析」の「具体的生命であり、最初の応用の一つ」であった(F. p. 105, J. p. 148 [p. 182])。その臨床医学は、ここまでに見たように、1.病気の記号の言語的構造と2.症例の確率的構造の二系列で探求を行ったとされた。フーコーはまた次のようにも言っている。

> 病気の領域に文法や確率のいろいろな構造 structures grammaticales et probabilitaires を導入することによって「可視的」になる分野を臨床医学は開くのだ。(…) まなざしに対して明晰な可視性の領域が開かれるのである。(F. p. 105, J. p. 148–149 [p. 182–183])

ここで「文法の構造」、「確率の構造」は上の二系列に対応していよう。まず、病気は言語的(言葉を換えれば文法的)な構造を持つと想定されたが、その病気の構造を分析し、復元・可視化する認識も「文法の構造」を宿すことだろう。一方、分析の過程においては、今しがた見たように、要素の組み合わせ、類比、頻度、確実性といった「確率的構造」が扱われる。フーコーはすぐ続けて、「文法的モデル modèle grammatical」と「数学的モデル modèle mathématique」という言い方もするようになる(F. p. 105, J. p. 149 [p. 183])。後者の「数学的」という言い方については、分析の過程で、概念の組み立て、分解、比較といった一種の計算(本論文 p. 8参照)が行われることも考慮されていよう(本論文後段 p. 17–18参照)。

しかし、フーコーによれば、臨床医学の場面において、「文法的モデルは、記号の分析に順応してしまい、暗黙に示されるにとどまり、形式化されずに概念の運動の底に包み込まれたまま」になったとされる(ibid.)。他方、「数学的モデルはつねに明確で、援用され、概念の展開の一貫性の原理として」あったとされる。この二つの「形象」は、互いに「重なり合うが、身を離そうともする」のだが、「この本源的なあいまいさ」は、当時まだ意識されていなかったという(ibid.)。

III. コンディヤック分析理論のあいまいさと臨床医学の展開

フーコーは、続く『臨床医学の誕生』第七章「見ること、知ること voir, savoir」においても、コンディヤック哲学との関連において、臨床医学の問題の探求を続ける。

「臨床医学が観察に認めるに至った特権」をフーコーは指摘する(F. p. 107, J. p. 152 [p. 186])[(1)]。ただし、認識に至るためには、観察する「まなざしは、一つの生成過程に沿って生み出されたものを真理として復元しなければならない。言い換えれば、組み立ての動き自体の

中で与えられたものを、まなざしに固有な働きにおいて再現しなければならない」（F. p. 108–109, J. p. 154［p. 188］）。フーコーはここでも、分析を生成過程を復元することとしたコンディヤックの主張（本論文 p. 8–9参照）をそのままなぞっている。ここで語られるまなざしは、コンディヤック的意味において「分析的」である（F. p. 109, J. p. 154［p. 188］）。

「可視的なもの visible」を記述する décrire することによって、「意味ある分析」が成就する。記述 description という行為によって症状は記号に変り（本論文 p. 8参照）、患者から病気へ、個人から概念への移行が可能となる（F. p. 114–115, J. p. 161［p. 197］）。その上で、フーコーは臨床医学の行方についてふれる。

> 記述することは現象〔表れ〕manifestations の配置〔秩序〕ordonnance をたどることである。しかし、それはまた現象の生成過程 genèse の理解可能な順序 séquence を追うことである。（…）それは見えるものを制御している言語への鍵を与えてくれる。それゆえ、コンディヤックやその後継者たちが科学的認識の理想と見なしていたよくできた言語(2)は、一部の医師たちがあわててやったように(3)計算の言語 une langue des calculs の方面に探し求められるべきではない。そうではなくて、記述する事象と、記述する際の言語活動 langage に同時に釣り合った à la mesure (de…) 相応言語 *langue mesurée* の方面に求められるべきなのである。（F. p. 115, J. p. 161–162［p. 197–198］）

まず、今しがた指摘した点、つまり、知ることが事象の生成過程を跡づけることである点が再確認される。また、「見えるものを制御している言語」という表現における「言語」は、対象を支配している法則を比喩的に語っていよう。

次いでフーコーは重要な指摘を行っている。認識は「よくできた言語」として結実すること、さらに、その「よくできた言語」は、「計算の言語」を志向するよりも、事象と言語活動の双方と釣り合った言語を志向すべきであるとされるのである。ここで「計算の言語」という表現は、コンディヤックの遺作である『計算の言語 *La Langue des calculs*』を思い起こさせる(4)。この著作においてコンディヤックは、日常言語と数学的言語の対照、算術の推論過程の分析、数式についての考察などを行っている。しかし、この引用箇所で、「計算の言語の方面」への探求は「一部の医師たちがあわててやった」ものであるとされ、その箇所にフーコーは原注を立て、「参照 前述第六章 Cf. *supra*, chap. VI.」としている。このことから、フーコーがここで語る「計算の言語の方面」への探求とは、上で「2. 症例の確率的構造」として見た、(1) 要素の組み合わせ、(2) 類比（アナロジー）の原理、(3) 頻度に対する知覚、(4) 確実度の計算（本論文 p. 12–14）といった「症例 cas を知覚する技術的な枠組み」の実践の試みを指しているのではないかと思われる。言葉を換えれば、この志向は、前述の「確率の構造」、「数学的モデル」（本論文 p. 14）を導入することであったであろう。しかし、フーコーが論じる時期の臨床医学

において、この方向での試みは実を結ぶことはなかったとフーコーは暗示するのである。

フーコーによれば、以上すべての認識理論は「一つのすごい要請 un formidable postulat」の上に成立している（J. p. 163［p. 199–200］, F. p. 116）。すなわち、「見えるもの〔可視的なもの〕はすべて語りうるものであり、完全に語りうるからこそ、完全に見える〔可視的な〕のだ」という要請である（ibid.）。本論文の「II–1. 病気の記号の言語的構造」の「(2) 分析」や「(3) 継起的秩序の復元」で見たように、すでに「よくできた言語」において「あいまいさも余すところもない網羅的な解読」が可能となること（本論文 p. 9）、あるいは「見られることと語られること」が「真実の中で一挙に相通じる」こと（本論文 p. 11）などが語られていたが、こうした想定もこの「すごい要請」を前提としたものであったであろう。

ただし、フーコーは次のように重要な限定を加えている。

> しかし、可視的なものが言表可能なものの中に余すところなく還元できるということは、臨床医学において、根源的な原理と言うよりも、一つの要求 exigence、一つの極限 limite であるにとどまる。完全な記述可能性 descriptibilité は、現存しながらも遠く退いている地平なのだ。それは基本的な概念構造であるよりもずっと、思考が見る夢 le rêve d'une pensée なのである（F. p. 116, J. p. 163–164［p. 200］）。

上の要請が夢であるという事情には、臨床医学の認識論のモデルとなったコンディヤックの論理学が影響を与えている、とフーコーは言う。フーコーが、コンディヤックの思考の推移とその影響について語るところを、長くなるが引用しよう[5]。

> 〔完全な記述可能性が夢にとどまるという〕このことには単純な歴史的理由がある。臨床医学に対して認識論のモデルの役目を果たしたコンディヤックの論理学は、可視的なもの visible と言明可能なもの dicible とが完全に一致して把握される学問を可能にはできなかった ne permettait pas のである。コンディヤックの哲学は、元になる印象の分析から記号を操る論理学へと徐々にずらされ a été peu à peu décalée、次いで、この論理学から、同時に言語であり計算であろう知を構成することへと徐々にずらされた。要素 élément という概念がこれら三つのレベルで、その都度違った意味内容で用いられたが、この概念が、この反省の全体にわたってあいまいな連続性を約束した。だが、そこにはっきりした一貫性のある論理構造はなかった。コンディヤックは、要素が知覚上のものであれ、言語上のものであれ、計算可能なものであれ、要素についての普遍的理論を引き出したことはなかった。彼はたえず二つの作業論理 logiques des opérations、つまり i. 生成の論理 logique de la genèse と ii. 計算の論理 logique du calcul の間でためらった。ここから分析の二重の定義が出てくる。まず、〔i. 一

方の定義は、〕複合観念を「それらを構成する単純観念に」帰着させ、「それら〔複合観念〕の生成 génération の進行 progrès をたどること」である[(6)]。次に、〔ii. 他方の定義は、〕「一種の計算によって、つまり、諸概念 notions を組み立てたり分解したりして、目指す発見に最も適した仕方でそれらの概念を比較する」ことで真理を探究することである[(7)]。

このあいまいさは臨床医学の方法に影響を及ぼした……

（F. p. 116–117, J. p. 164［p. 200–201］）（i.、ii. は引用者が便宜的に付加した。）[(8)]

そもそも根拠があいまいであったものは、夢にとどまらざるをえないであろう。しかし、フーコーの語るところを検討しよう。「コンディヤックの論理学」は臨床医学の認識論のモデルであったとされる。しかし、ここで著作としての『論理学』が指示されているかどうかははっきりしない。一方で、フーコーは、コンディヤックの哲学が、印象の分析→記号を操る論理学→同時に言語であり計算である知、と「徐々にずらされた」としている。これ以上の展開はなされず、この「ずれ」は時間的な推移であろうと思われるものの、現実に刊行されたコンディヤックの著作との関係をフーコーがどのように考えているのかは不明である[(9)]。コンディヤックの「分析」の定義については、『人間知識起源論』第一篇第二部第七章 §66におけるものをすでに上で一度見たが（本論文 p. 8）、この引用の後半でのフーコーの記述に沿ってあらためて検討しよう。

フーコーが語る分析の〈i. 一方の定義〉は、同じ『人間知識起源論』の第一篇第三部「単純観念と複合観念について」（章分けなし）から引かれている。フーコーが引用した部分をやや広く引用し直そう（フーコーが引用した部分には破線を付す）。

「複合観念を（…）正しく知ることができるのは、ただ複合観念を分析することによってである。すなわち、複合観念を、それらを構成する単純観念に帰着させ、i. それら〔複合観念〕の生成の進行をたどらねばならないのである。（…）〔ところで、〕分析においては、i. 事物の生成そのものを人は追究せざるをえない」（EOC I–III–9, 10）。

すでにフーコーとともに見たように（本論文 p. 8–9, p. 13, p. 15）、コンディヤックの哲学において、人は事物の生成過程を記述することにおいて復元しようとする。この過程で複合観念が生み出される。したがって事象と複合観念は対応している。「分析」の対象は、直接には「複合観念の生成の進行」であるが、それは同時に「事物の生成そのもの」を確認することである。

分析の〈ii. 他方の定義〉は、『人間知識起源論』第一篇第二部第七章 §66から引かれており、この箇所についてはすでに上で一度検討した（本論文 p. 8–9）。フーコーによる引用（破線部分）の前後も含めて再度引用しよう。

「分析が真理を探究するのは、決して一般命題の助けを借りてではない。常に ii. 一種の計算によって行うのである。つまり、概念 notions を組み立てたり分解したりして、目指す発見に最

も適した仕方でそれらの概念を比較するのである。ふつう論争を増やすことにしかならないさまざまな定義によってでもなく、i. おのおのの観念の生成 génération de chaque idée を説明することによってなのである。」(EOC I–II–VII–66)

フーコーはこの部分から「ii. 計算の論理」を抽出したわけだが、見て分かるように、実際にはコンディヤックは併せて「i. 生成の論理」にもふれている。『起源論』のこの部分を執筆した一時点においてもコンディヤックはあいまいである。また、コンディヤックは、『論理学』に至るまで、この二つの方法のそれぞれや、相互の関係について、立ち入った展開はついにしていない。フーコーの言うように「分析」の方法の細部はあいまいなままである。

上の引用部分に続くフーコーの展開を追おう。

> このあいまいさは臨床医学の方法に影響を及ぼしたが、この方法は、コンディヤックの〔計算の方向へと向かった〕変化とは正反対の概念上の傾斜に沿って動いた。つまり、起点も完結点もちょうど逆転していたのである。
>
> 臨床医学の方法は、計算の要求から生成の優越へと再び降りてゆく。つまり、可視的なものと言表可能なもの énonçable の一致という要請 postulat を、普遍的で厳密な計算可能性を用いて定義しようとした後で、この要請に、完全で徹底的な記述可能性という意味を与えるのである。根本的な作業はもはや組み合わせ combinatoire の次元にはなく、統語法上の転写 transcription syntactique の次元にある。(F. p. 116–117, J. p. 164–165［p. 201］)

上では、コンディヤックの「ずれ」は最後には「同時に言語であり計算である知」へと向かったとされた。ここでは、コンディヤックは「計算の要求」の方向へと向かったと示唆される。コンディヤックが「計算の論理」を取り込もうとした態度は一貫していたとフーコーは考えたのであろうか。他方、ここでは、「計算の論理」は「普遍的で厳密な計算可能性」とされるものの、すぐ次の文で、その実態は諸概念の「組み合わせの次元」にあると示唆されている(9)。そしてフーコーは、臨床医学がこうした「計算」、「組み合わせ」の探求から、観念の生成過程を跡づける方向へ向かったとし、さらに、その際の根本的作業は、その生成過程を「統語法」上で「転写」することになるとするのである。

フーコーは続けて、この新たな志向の実例としてカバニス Pierre Jean Georges Cabanis（1757–1808）とその著作『医学の変遷と改革についての瞥見 *Coup d'œil sur les révolutions et la réforme de la médecine*』(1804) を挙げている（F. p. 117–118, J. p. 165［p. 202］)(10)。フーコーは次のように語る。

> カバニスの著書『医学の変遷』の中では、学問の確実な形は、ある種の計算によって規定されるわけではなく、本質的に表現上の諸価値を帯びた構成によって規定される。蓋然的なも

のから確実なものへ向かうために計算を設定することはもはや問題ではなく、知覚された要素から言説の一貫性へ向かうために統語法を確定することが問題なのである。「したがって、ある学問の理論的な部分は、分類上の連鎖の単なる言表、また、この学問を構成するあらゆる事実の諸関係の単なる言表であるべきなのだ。つまり、これらのものの、いわば概略的な表現であるべきなのだ」（Cabanis, *Coup d'oeil sur les révolutions et la réforme de la médecine* (Paris, 1804) p. 271）。医学の構築において、カバニスが確率の計算に場を与えるとしても、それはただ、科学的言説の全体的な構成の中の、他の諸要素に混じった一要素としてのみのことなのである。（…）カバニスがこの〔コンディヤックの『計算の言語』の〕文章をいくら引用したとしても、彼の思考は認識論的に、〔コンディヤックの〕『人間知識起源論』と同じレベルにある。（F. p. 118, J. p. 165［p. 202］）

カバニスは『計算の言語』を引用するが、彼の思想は全体としてこの著作のレベルにはなく、むしろ『起源論』のレベルにあるとされる。こうして、この時代の臨床医は、可視的なものの構成形態と言表可能なものの統語法上の規則の間に平衡を保つことができると考えたとされる（F. p. 118, J. p. 165–166［p. 202］）。この状態は、先にフーコーが語った「記述する事象と、記述する際の言語活動に同時に釣り合った相応言語」（本論文 p. 15）が実現した状態と言うこともできるであろう。フーコーは続ける。

まなざしは主権者として〔世界という〕テキストを読み、そのテキストから、努力を払うこともなく[11]明晰なことば parole を拾い集め、これを二次的だが元と同一の内容をもつ言説 discours second et identique へと復元した。可視的なものによって与えられたこのことばは、何も変えずに、見るものを提供したのである[12]。まなざしは、自らの知覚野に自分で置いた可視性の諸構造を、自らの主権者的な働きにおいて再び取り上げるのであった。（F. p. 118, J. p. 166［p. 203］）

まなざしは自ら対象を観察・分析し、そこに「可視性」を生み出している「諸構造」を見いだす。次いでまなざしはその諸構造を「再び取り上げ」、言説化するであろう。しかし、このように事象の可視性、透明さ、理解可能性を一般的に立ててしまったことで、自らの認識結果の検証や、自らの認識行為についての理解が進まない結果を招いたかもしれない。フーコーは次のように続ける。

この透明さの一般的形式は、言語の地位 statut、あるいは少なくとも諸要素からなる体系の地位を不透明なままにする。ところが、これらこそ、この透明さに対して、同時に基盤であり、正当化するものであり、精緻な道具であるべきなのである。このような不備 carence は、

コンディヤックの論理学の不備でもあったが、いくつかの認識論上の神話に場を与えてしまい、これらの神話がこの不備を覆い隠すことになる。(F. p. 118, J. p. 166［p. 203］)

透明さは根拠なしに仮定されるべきではない。透明さは獲得されるべきものであろう。その意味で、フーコーの指摘は全く適切であろう。一方、認識の「道具」となるべき言語が不透明なままであったという「不備 carence」は、「コンディヤックの論理学の不備でもあった」という（ibid.)。ここで「コンディヤックの論理学」とは、著作としての『論理学』よりも、コンディヤックの思想における「記号を操る」思考法、さらには「計算の論理」の取り込みを指していると思われる（本論文 p. 17–18参照)。

さて、フーコーは、言語が不透明であったという「不備」から「いくつかの認識論上の神話」が生まれたという。そうした認識論上の神話としてフーコーが挙げるものを一瞥しておこう。

1．病気はアルファベット的構造を持つ（F. p. 119, J. p. 166–167［p. 203–204］)

フーコーによれば、18世紀末の文法家にとっては、アルファベットこそ、言語を分解したときに、最後に残る形と思われた。同様に臨床医たちも、一つの症状から受ける印象をアルファベットのような最小単位と見なした。印象はそれ自体では何も意味しないが、他の印象と組み合わされることによって、意味 sens と価値 valeur を帯びる、と考えられたという。フーコーは、こうした考え方をした一人としてカバニスを挙げている。(13)

2．病気の存在に対する唯名論的還元（F. p. 119–120, J. p. 167–168［p. 204–206］)

当時の臨床医たちにとって、病気の多様性は、結局は一人一人の個人へと帰着することになる。病気は単なる名称にすぎない。実体性をもたない唯名論的、抽象的な名称にすぎない。ただし、諸症状の特定の集合に対して、特定の名称（病名）を使って「言語による指示 désignation verbale」を行うのだから、その名称は厳密な構成 architecture rigoureuse（つまり意味内容）をもつと考えられた(14)。フーコーはここでもカバニスを例にとっている。フーコーがなぜこの項の考え方も「神話」に含めるのかははっきりしないが、症状の集合の成り立ちに名称の成り立ちが対応するという考え方――これはコンディヤックに由来する考え方なのだが――に神話的なものを見たのかもしれない。

3．病気に対する化学的タイプの還元（F. p. 120–121, J. p. 168–170［p. 206–207］)

フーコーによれば、上に見たように、分析という概念は、臨床医学において「半ば数学的、半ば言語的」(F. p. 121, J. p. 169［p. 207］) な意味を持った。しかし、19世紀初頭に至ると、分析の概念は化学的意味へと近づくとされる。分析は結局、組み合わせから統語法へ、そしてついに化学のモデルへと移るのだとされる。それは構成要素を分離して組成を決定し、関係の形態を基盤として分類することであったという。フーコーはここで Demorcy-Delettre や Amard といった論者の名を挙げている(15)。

以上、『臨床医学の誕生』の第六章「記号と症例」、および第七章「見ること、知ること」の内容をコンディヤックとの関係において検討してきた。臨床医学の観察のまなざしは、対象である病気を分析し再構成した。臨床医は対象を正確に復元できるはずだという信念、対象の完全な記述可能性という信念を持っており、その理想に向かってさまざまな試行を繰り返した。分析という基本的な方法は一貫していたが、分析の思考を支える記号体系は、要素の組み合わせ、統語法上の転写、そして「化学のモデル」と呼びうるものへと変遷をたどったとされるのである。

Ⅳ．19世紀近代へ

『臨床医学の誕生』の、続く第八章「死体解剖」、第九章「不可視な可視」、第十章「熱病の問題」では、臨床医学のその後がたどられる。コンディヤックの思想の後の世代への影響が直接的に検討されるわけではないが、続く時代の思想の展開についてのフーコーの考え方を知ることは、コンディヤックの位置づけをよりよく理解するために意味があろう。

医学の世界においては、まもなく病理解剖学という形の下に、「ふれることのできる身体空間」が開かれてくるとされる。これまでの症状に基づく医学に対して、「器官や病巣や原因の医学」、あるいは「病理解剖学に従って秩序立てられた臨床医学」が興ってくる（F. p. 123, J. p. 172［p. 210］）。病理解剖学を切り開いたのはビシャBichat, Marie François Xavier (1771–1802) である[(1)]。フーコーによれば、ビシャは諸器官 organe のそれぞれの塊に、同質の組織 tissu の重なりを見る。解剖学的に類似した組織の層は諸器官を貫通している。こうしてビシャは、要素的であり、普遍的である組織を明るみに出そうとする（F. p. 130, J. p. 181［p. 220］）。この記述方法は、コンディヤックに由来する「分析のあらゆる応用形態の中で、数学的なモデルにおそらく最も近いものであろう」とされる（ibid.）。

ビシャは死体の解剖によって病巣を明らかにすることができた。思うに、ビシャがこのように解剖学を開拓したことは、分析のための観察という臨床医学の大きな認識論的構造の中で、観察に実験的要素が加わって、認識のあり方が革新されたということなのではないか。こうした認識の革新の中で、上に見た認識上の神話も姿を消していくのではなかろうか。

ただし、フーコーによれば、ビシャにおいては、いまだ病気の可視性が優位にある原則で、病気の局在はその結果にすぎなかった。しかし、ブルセ Broussais, François Joseph Victor (1772–1838)[(2)]においては逆になって、病気は本来局在的なものであり、ただ二次的にのみ可視的となるという（F. p. 192, J. p. 253［p. 309］）。1816年のブルセの著書[(3)]とともに、病気の（本質としての）存在 être de la maladie という考え方は消滅する[(4)]。例えば熱病という存在は解体した。熱病も含めて病気は、刺激因子 agent irritant に対して生体内の諸組織が反応することと考えられるようになった（F. p. 194–195, J. p. 255–256［p. 311–312］）。臨床医学は、ブル

セにおいて、病める器官に対する医学的認識方法 méthode médicale に到達した（F. p. 195, J. p. 257［p. 313］）。病理的反応の医学の時代が始まるとも言える（F. p. 196, J. p. 258［p. 314］）。フーコーは、1816年以来、医師のまなざしは病める生体 organisme malade に注がれうるようになったとするのである（F. p. 197, J. p. 260［p. 316］）(5)。

むすび

以上、フーコーの『臨床医学の誕生』をコンディヤックに焦点を当てつつ検討した。その論旨を再度要約すれば次のようになろう。18世紀末から19世紀初頭にかけてのフランスを中心とする臨床医学は、コンディヤックがすでに掲げていた「分析」という方法を意識しながら発展した。その観察のまなざしは、対象である病気を分析し再構成した。臨床医は対象を正確に復元できるはずだという信念に支えられていた。分析という方法は一貫していたが、分析の思考を支える記号体系は、計算の論理の試行を経て、カバニスらにおける統語法上の転写、そして「化学のモデル」と呼びうるものへと変遷をたどったとされた。臨床医学は、その後さらにビシャらを経て、ブルセにまで至り、病める器官に対する医学的認識、病理的反応の医学にまで至った。医師のまなざしは病める生体 organisme malade に注がれうるようになった。コンディヤックに触発されながら発達した臨床医学は、近代医学のまなざし regard médical moderne（F. p. 197, J. p. 260［p. 316］）として――「病原体」はいまだ発見されていなかったが――新たな出発点に立ったのである。

フーコーは、合理論者デカルトに始まり、合理論の土壌の中で発展した「普遍学」の理念を基礎とする時代、ほぼ17、18世紀に相当するこの時代を「古典主義時代」と呼んだ。一方、「人間学」に象徴される時代、ほぼ19世紀から現代にまで至る時代を「近代」と見なした。『言葉と物』では、二つの時代の移行の局面が具体的に考察されるよりは、二つの時代はむしろ図式的にとらえられ、相互の断絶、飛躍が強調されるきらいがあった。『臨床医学の誕生』においては、臨床医学の場面に限られはするが、二つの時期の間の移行、知の基本的枠組み（エピステーメー）の遷移の具体的なあり方が明らかにされていると考えられる。フーコーは臨床医学の分野での探求に匹敵する具体的探求を他の分野で行うことはなかったが、知のさまざまな場面で遷移のより具体的あり方を探求することができるのではなかろうか。私たちは初期フーコーの思考を『言葉の物』の図式的思考によって代表させてしまいがちだが、『臨床医学の誕生』を再読することによって、そうした偏りを修正することができよう。

コンディヤックについては、私たちは『臨床医学の誕生』によって、彼の「分析」という考え方が、臨床医学の分野においてもった大きな影響力、大きな役割を再認識することができた。本論文はフーコーによるコンディヤックの評価を検討することがねらいであったため、コンディヤックの分析論の細部に立ち入ることはできなかった。この点については、機会をあら

ためたいと思う。ここでは、コンディヤックとその分析理論を一般的にどう評価すべきかについて筆者の考えるところを一言付け加えておきたい。コンディヤックはもとより経験論者であり感覚論者であった。合理論者デカルトに始まり、合理論の土壌の中で発展した「普遍学」の理念を基礎にもつ「古典主義時代」の中で、コンディヤックがロックを受け継いで経験論的思考、実験的思考を発展させたことを何より評価すべきであろう。フーコーの『言葉と物』における主張に従えば、コンディヤックより9歳年下のカントは、人間の限界を認識しつつも、超越論を導入することで、逆に「人間」の神話を作り上げる道を開いてしまった。一方、コンディヤックの思考の中心にも、感覚をもつ人間が位置づけられている。また、本論文第II節注13の末尾においてふれたように、コンディヤックは「ものごとが何であるか」は不可知であるとするなど、カントに先んじて、カントに通じる観点を持ってもいた。しかし、コンディヤックにおける人間はあくまでも分析可能であり、先験性という神話を帯びることはない(1)。コンディヤックは、人間の神話を作ることなしに、世界観の経験論的方向への局面転換に寄与したと言えよう。

コンディヤックの「分析」の考え方は、方法論として、臨床医学の分野にとどまらず、多方面に影響を与えたことが明らかになりつつある(2)。コンディヤックはまた、経験論・感覚論に基づく自らの思想自体においても、たとえば『感覚論』において人間精神のダイナミックなあり方を描き出した(3)。また、本論文ではふれることができなかったが、フーコーが『言葉と物』で素描するように、コンディヤックが、その「一般文法」や、『交易と政府』における交換の分析によっても、言語学や経済学の発展に何がしかの寄与をしたのであれば、それも正当に評価されるべきであろう。

注

はじめに

(1) *Naissance de la Clinique — Une archéologie du regard médical*, P.U.F., 1963. 邦訳、『臨床医学の誕生――医学的まなざしの考古学』、神谷美恵子訳、みすず書房、1969〔新版2011, 訳文は旧版と同一〕。邦訳と英訳（The Birth of the Clinic — An Archaeology of Medical Perception, 1973）は共に原著初版に基づく。一方、原著は1972年に改訂版が刊行された。改訂内容は、1975年4月以降の邦訳（旧版）に収録された「追記」（p. 316）を参照されたい。本論文では、原著は改訂後の1997年版（« Quadrige » 叢書版）を用いる。この著作から引用する際は、邦訳を参考にしたが、適宜筆者が訳し直した。

(2) *Les mots et les choses — une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966 (1977). 邦訳『言葉と物――人文科学の考古学』、渡辺・佐々木訳、新潮社、1974. この著作から引用する際も、邦訳を参考にしたが、適宜筆者が訳し直した。なお、『臨床医学の誕生』と『言葉と物』を含む、初期のフーコーの思想については、中山元『フーコー 思想の考古学』新曜社、2010、がすぐれた解釈を日本語でわかりやすく提示している。

(3) 本論文での『臨床医学の誕生』にかかわる参照箇所、引用箇所などの指示は、（F. p. ---, J. p. --- ［p. ---］）の形式で、順にフランス語原著、邦訳旧版、邦訳新版（［　］内）の該当ページを示す。訳文中の〔　〕は筆者による補足を示す。なお、この注3を付した「臨床医学に対して認識論のモデルの役目を果たし

た〔コンディヤックの論理学は……〕」という部分は、原著の改訂版で付加されたため邦訳にはない。

(4) 一方、『言葉と物』で言及される著作は主に『文法』(1775)(『パルマ公王子の教育のための教程』〔全16巻〕第 1 巻)と『交易と政府』(1776)で、一箇所でだけ『起源論』が引かれる。本論文に内容的に関連する、コンディヤックについての日本語文献としては、山口裕之『コンディヤックの思想』勁草書房、2002、がある。

I.

(1) 『言葉と物』にかかわる参照箇所、引用箇所などの指示も、(F. p. ---, J. p. ---)の形式で、原著(F.)と邦訳(J.)の該当ページを示す。邦訳も参考にした。訳文中の〔 〕は筆者による補足を示す。

(2) 藤田公二郎氏の口頭発表「狂気の呼び声――フーコーの超越論的考古学とその自己解体」(日仏哲学会2017年春季大会、2017年 3 月18日、立命館大学)によれば、『臨床医学の誕生』はフーコーの博士論文『狂気の歴史』の執筆作業の中から構想され、一方、『言葉と物』は副博士論文「カント『人間学』序文」から出発して構想された。

(3) signe は邦訳では「徴候」と訳されているが、本論文では一般的に「記号」と訳す。

(4) 生成〔過程〕genèse:発生、形成と訳されることもある。事象の生成、出現の過程を理解することが、その事象を根本的に理解することになると考えられた。

II.

(1) フーコーはこの 3 点を、「 1 . 諸症状は、不可分的に意味するものであり、意味されるものでもある原初の層を構成している」、「 2 . 意識の介入が症状を記号に変える」、「 3 . 病気の存在はその真実において完全に言表される」といった詩的なタイトルの下にまとめているが、本論文では、各点の要点と思われるものを項目として立てる。

(2) この項でフーコーが参照する論者は、Broussonnet と Audibert-Caille である。フーコーは当時の臨床医学者たちの著作を渉猟し、引用も交えて立論している。しかし、当時の著作で、筆者が直接当たることができたものは、コンディヤックとカバニスのものにとどまる。

(3) コンディヤックにおける自然的記号や動作言語〔身ぶり言語〕langage d'action については、次の拙論を参照のこと。「コンディヤックの記号概念――松永澄夫氏のコンディヤック関係二論文によせて」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第36巻第 2 号、2015年、p. 3–22. コンディヤックにおいて、動作〔身ぶり〕言語は、たとえば痛みに伴う叫び声や身のよじりのような自然的記号からの転換として生じたと考えられた(同論文 p. 9参照)。

(4) ここにフーコーは参照箇所を指示する原注を置いている。そこでは参照箇所が次のように記載されている。CONDILLAC, *Essai sur l'origine des connaissances humaines* (*Œuvres complètes*, an VI), t. I, p. 262. これは、フランス革命暦 6 年(1798年)に刊行された『コンディヤック著作集 Œuvres de Condillac』第 1 巻に収録された『人間知識起源論』の262頁、ということである。この『著作集』は、アルヌーArnoux とムニエ Mousnier の編集により、ウエル Houel 社から刊行されたが、コンディヤックの網羅的な初めての「全集 Œuvres complètes」であり、コンディヤックが生前自著刊本に書き込んだ見直しも反映していることから従来最も重要視されてきた。

　フーコーが指示するこの箇所は、『起源論』第 II 篇「言語と方法について」第 I 部「言語の起源と進歩について」第 I 章「動作言語と分節音言語の起源について」第 2 パラグラフに当たる。本論文では、『起源論』への指示に関して、フーコーが示すウエル版の頁は掲げず、該当箇所のパラグラフまでを略号によって示す。すなわち、まず著作名(原著タイトルの頭文字から EOC)、次にローマ数字によって順に篇(partie)、部(section)、章(chapitre)、最後にアラビア数字によってパラグラフとする(フーコーがここで指示した箇所は EOC II–I–I–2 となる)。なお、岩波文庫の邦訳『人間認識起源論』では、同じ区分を順に部、章、節と訳しているので注意されたい)。

(5) 「意識」は「まなざし」と結びつけて使われ、ほとんど同一視される。本論文 p. 4を参照のこと。また、「まなざし」が人間のいわゆる理解能力の比喩として使われる点については、本論文 p. 3を参照のこと。

(6) コンディヤックは、『臨床医学の誕生』におけるフーコーの分析に発想の源を提供していた。たとえば、

まなざし regard という術語も、コンディヤックが『論理学』第一部第二章などで使っている（本論文 p. 11–12のコンディヤックからの引用参照）。

(7) この項でフーコーが参照する論者は、Landré-Beauvais, Favart, Demorcy-Delettre といった人たちである。

(8) まなざしと意識については、本節の注 5 を参照のこと。

(9)『起源論』における「分析」の定義としては、以下の箇所も知られている。「経験が観念を与えるのと同じ順序で観念を探究して、概念を形成する方が、〔デカルトがやったように〕定義から始め、次に事物のさまざまな特性を演繹するよりも、ずっと自然である。／こう細かく見れば分かるように、真理の探究において従うべき順序は、私が分析について述べた際にすでに示した順序と同じである。つまり、さまざまな観念の起源にまで遡り、それらの生成を解明し、それらをさまざまに組み立てたり分解したりすること、そして、それらの観念を、それらの関係が分かるようなあらゆる面で比較することである。」（EOC II–II–III–35〜36）

(10) 本論文 p. 13参照。

(11) フーコーが原注を立てて指示するとおり、フーコーは今しがた検討した『起源論』の箇所（EOC I–II–VII–66）から再度引用している。

(12)〔原注〕Demorcy-Delettre, *Essai sur l'analyse appliquée au perfectionnement de la médecine* (Paris, 1810), p. 102.

(13)『論理学――考える技術の初歩 *La Logique, ou les premiers développements de l'art de penser*』（1780）は人間精神の「分析」という働きを論じた著作である。標題から予想されるかもしれない思考の形式・法則を明らかにしようとするものではない。本論文では、*Oeuvres philosophiques de Condillac*, édité par G. Le Roy, P.U.F., 1948, v. 2, p. 371–416に収められた版を用い、併せて邦訳（山口裕之訳、講談社学術文庫、2016）も参照した。本論文における、この著作についての指示は、（F. p. ---L/R, J. p. ---）の形式で、原著（F.）と邦訳（J.）の該当ページを（原著についてはさらに L/R でページの左欄（L）か右欄（R）かを）示す。

この著作は論理学の「初級教科書」として執筆された。文庫版の日本語訳で、実質170頁ほどの小著の部類の著作である。全体は 2 部構成で、第一部では、分析の方法が説明され、それは自然自体から学ぶことだとされる。次いで、この方法を用いて、人間の観念や魂の能力の起源と生成が説明される。第二部では、言語の起源について考察され、また、推論の技術は「よくできた言語」に還元されるとされる。第二部第七章、第八章では、推論を語によって展開する場合と数学の方程式を解く場合とが類比的に語られる。総じて内容は、かつてコンディヤック自身が『人間知識起源論』（1746）で論じた内容を受け継ぎ、発展させるものとなっている。

ただし、フーコーは『臨床医学の誕生』において、著作としての『論理学』にはふれていない。本論文は『臨床医学の誕生』におけるフーコーのコンディヤックへの言及を扱うものであり、『論理学』自体を論じることは他の機会に譲らなければならない。ただ「よくできた言語」に関わる第二部第五章（F. p. 401L–, J. p. 153–）から、この言語についていくつか指摘したい。以下、理解を助けるため、コンディヤックの主張に 0 事物それ自体、 1 事物の関係、 2 一般的観念、 3 言葉、のレベル分けの指標を加える（ 2 と 3 は同じレベルと見なすこともできるが便宜的に区別する）。

コンディヤックによれば、「 2 . 一般的で抽象的な観念が私たちの精神において持つ実在性を支えるもの」は「 3 . 名前 nom」である。こうした 2 . 観念を明確化し、「 3 . よくできた言語」を作ること、その上で「推論」をすること、こうしたことはすべて「分析」から学ばれる（F. p. 402L, J. p. 156）。この分析は 1 . 対象の「観察」に基づく（F. p. 402R, p. 403L, J. p. 159, 160）。結局、「 3 . クラス〔に分けること〕が私たちに必要なのは、ただ、 2 . 判明な観念を作るには研究したい 1 . 対象を分解することが必要だからである」（F. p. 402L, J. p. 157）。

「よくできた言語」とは具体的にはどのようなものか。コンディヤックは言う。「〔既存の言葉との〕最大限の類比関係が〔新たな〕言葉の選択を決定すべきだし、そのあらゆる語義を決定すべきであると私たちは感じ取れるだろう。（……）／つまるところ、私たちが言葉を利用するすべを知るのは、言葉の第一の〔中心的な〕語義を言葉が第一に〔最初に〕使用された場面に求め、他の語義は類比関係の内に求めるという習慣を、分析のおかげで身につけたときなのである」（F. p. 402R, J. p. 158）。よくできた言語においては、 3 . クラスの、それゆえ 2 . 観念の「類比関係が私たちの判断や言葉 mot(s) の理解を導いてくれる」（F. p. 402L, J. p. 156）。

また、コンディヤックは次のように言う。「3 . クラスとは名称に他ならないということに納得すれば、私たちは類や種が 1 . 自然界に実在するなどと思うことはないだろう。そうしたとき、私たちが類や種といった言葉において見るのは、 1 . 私たちとの関係やものごと（choses, 事物）同士の関係に従ってものごとを 3 . クラス分けする仕方だけである。また私たちは、私たちに発見できるのはそうした関係だけであることを認め、 0 . ものごとが何であるか ce que les choses sont について何か言えるなどと考えたりはしないだろう。結果として私たちは多くの誤りを避けることができる。」（F. p. 402L, J. p. 157）

3 . 類や種は自然界に実在しない。これは極めて唯名論的な主張である。しかし、そうした類や種は、「1 . 私たちとの関係やものごと同士の関係」に根拠を置いている。その意味では類や種は実在性をもつであろう。またここで、「ものごと同士の関係」を、類や種の秩序として理解しようとするコンディヤックの立場は、フーコーが古典主義時代の典型的な医学と見なす「種の医学」を思い起こさせる。この医学においては、ものごと同士の関係の一例であろう病気は、種類ごとに本質を持つものと考えられ、分類の空間において理解されていた。コンディヤックの唯名論的な類や種はもはや実在的な本質を持つことはない。とはいえ分類的思考の影響は残していよう。なお、コンディヤックの「分析」という方法は、分類的思考の枠内に限定されるものではなかった。この点については、本論文の続く部分を参考にされたい。最後に、コンディヤックの「 0 . ものごとが何であるか」は不可知であるとする主張は、次世代のカントの「もの自体」は不可知であるとする有名な主張を思い起こさせることも確認しておきたい。

(14) コンディヤックは推論の明証性を identité（同一性ないし自同性）に見出した。コンディヤックにおける自同性の問題については次の拙論も参照のこと。「デリダのコンディヤック読解――自同性の問題を中心に」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第30巻第 2 号、2009、p. 21–52.

(15) この項でフーコーが参照する論者は Pinel である。

(16) 種の医学　フーコーは「類の医学 médecine des classes」（F. p. 25, J. p. 48［p. 62］）という言い方もしている。「 病気を疾病分類学の抽象的空間に位置づけ、病気の一般的形態を認識する 」ことがその内容であろう（F. p. 23, J. p. 46［p. 59］）。種としての病気を問題とするのであるから、治療法も一般的なものとなったであろう。コンディヤックにも、事物の世界を類や種の秩序として考えようとする傾向があったようで、これについては、本節の注13を参照されたい。

(17) 原語の articulation（動詞形は articuler, s’articuler）は、本来は動物の「関節」（動詞形は「関節で結合する」）の意味だが、しばしば類比的・比喩的に、「いくつかの異なった要素が、全体が機能するのに役立つように組織されている状態」「二つのものごとの連結」などの意味で使われる（Cf. Grand Robert, TFL 両フランス語辞典）。また、言語学関係で、個々の音をはっきり発音するという意味でもよく使われる。『言葉と物』の邦訳では、articulation は、「〔要素の〕切断に重点がある場合には『分節化』、接続に重点がある場合には『連接』と訳出した」とされている（「事項索引」の「分節化」の項）。ただし、『言葉と物』に現れるこの語と動詞形で、本論文に関連する範囲内のものは、邦訳ではすべて「分節化／分節化する」と訳され、「連接／連接する」と訳される場合はない。また、中山元は「分節／分節する」と訳している。筆者は、フーコーにおいてこれらの語は基本的に「要素が接続された状態」を表していると考えるが、そのニュアンスは「連接（する）」と訳した方が出しやすい。一方で、フーコーにおいては、これらの語は、多くの場合、言語・表象を含めて広い意味での記号について語られる。この点においては、「連接（する）」では記号は連想されにくく、「分節（化）（する）」の方が記号との親和性が高いと思われる。以上の理由で、本論文では、記号に関わる場合は「分節／分節する」と訳し、それ以外の場合は「連接（する）」と訳すことにする。

(18) Philippe Pinel, *Nosographie philosophique* (Paris, an VI), introd. p. xi〔以上、原注〕. ここでピネルは、コンディヤック『論理学』第一部第二章から引いている（F. p. 375L, p. 376L, J. p. 39, p. 42）。フーコーが孫引きしたピネルによる引用の、省略部を挟んだ前半部・後半部は、『論理学』では後半部（J. p. 42）→前半部（J. p. 39）の順で現れる。

(19) この点については、本論文 p. 13（＝II–2–(1)）のフーコーからの引用を参照されたい。

(20) フーコーのテキストでは次にコンディヤックの名が現れるが、これは、フーコーが「経験的」かどうかを問題の基準とはしないことを示す際に、コンディヤックの名を引いたにすぎない。「コンディヤックがたどったと推定される軌跡をたどって、医学が知覚されたものに対する最終的に経験的な尊重に立ち戻った

というわけではない。そうではなく、〔コンディヤックの〕分析の場合と同様、臨床医学においても、現実のものの骨組みは言語のモデルに従って描かれる dessiné(e) のだ。」（F. p. 96, J. p. 137［p. 169］）

(21) この項でフーコーが参照する論者は、カバニス Cabanis である。

(22) これ以降の 3 つの項でフーコーが参照する論者は、Audibert-Caille, Brulley, Pinel, Dumas, Double, Zimmermann, Roucher-Deratte といった人たちである。

III.

(1) 本論文 p. 11–12での『論理学』からの引用（孫引き）において、コンディヤックは「分析」の一部あるいは前提として「観察」にふれていた。

(2) よくできた言語については本論文 p. 9–10を参照のこと。

(3) 前述、第六章参照〔以上、原注〕。計算の論理の側に立った（立とうとした）論者は Cabanis（カバニス）, Audibert-Caille, Brulley, Pinel, Dumas, Double, Zimmermann, Roucher-Deratte といった人たちであった。

(4) 遺作である『計算の言語 *La Langue des calculs*』（1798年刊行）でコンディヤックは、算術を一つの厳密な言語として考察している。

(5) 以下に引用する箇所は、ジャック・デリダ Jacques Derrida もそのコンディヤック論、*L'archéologie du frivole*, Galilée, 1990の第 1 章、p. 33（邦訳、『たわいなさの考古学』、飯野和夫訳、人文書院、2006、p. 27）でふれている。

(6) CONDILLAC, *Origine des connaissances humaines*, p. 162〔以上、原注〕（＝EOC I–III–9）

(7) *Ibid.*, p. 110〔以上、原注〕（＝EOC I–II–VII–66）この箇所については、フーコー自身先に引用しており、本論文 p. 8–9においてすでに論じた。

(8) i., ii. は引用者が便宜的に付加した。i. ii. は先に見た i. 記号の言語学的構造と ii. 症例の確率的構造、あるいは i. 文法的モデルと ii. 数学的モデル、に対応していよう。

(9) フーコーの言うコンディヤック哲学の推移と、コンディヤックの著作との対応関係を整合的に考えることはなかなか難しい。フーコーが指摘する「印象の分析」、「記号を操る論理学」、「同時に言語であり計算である知」といった特徴は、『人間知識起源論』（I–II–VII, I–III, II–II–III〜IV など）の議論においても、『論理学』の議論においても、同時に認められるように思われるからである。私見だが、コンディヤックの認識論の要諦は一貫して「印象の分析」にあるが、分析は「記号」なしには成立しない。最も広く用いられる「記号」は「言語」であり、言語を用いた分析を論じる学問が、コンディヤックの用語法における「論理学」であることになる。そして、「言語」による分析あるいは推論には、代数学の方程式を解くこと、あるいはその過程で「計算」（算術）をすること、との類似性が認められるとされる。言語を用いた推論も、方程式の解法の厳密さを目指すべきとされるのである。フーコーは「同時に言語であり計算である知」と言っているが、「知 savoir」は、言語による分析（ないし推論）と代数学の計算に共通する、〈同一性をたどることによる推論〉（『論理学』第二部第七章参照）に基礎を置くと言えるかもしれない。

(10) カバニス Pierre Jean Georges Cabanis (1757–1808) はフランスの医師・生理学者・哲学者。コンディヤックの分析理論の影響を受けた思想潮流である「観念学派 ideologists」の一員に数えられる。実は、カバニスは「計算の論理」の側に立とうとした論者として、本論文第 II 節注21、本節（第III節）注 3 で名前が出ている。カバニスについては次の解説論文がある。村松正隆「観念学派とその周辺」、『哲学の歴史』第 6 巻、中央公論新社、2007、pp. 572–596。

(11) フーコーが「努力を払うこともなく」と付け加える意図は正確にはわからない。ただ、フーコーが『臨床医学の誕生』で引用（孫引き）した箇所で、コンディヤックは次のように語っていた（本論文 p. 11–12参照）。「〔対象を観察する場合、まなざしが従うべき〕秩序はどのようなものだろうか？　自然自体が教えてくれる。それは自然がさまざまな対象を提示してくる秩序である。対象の中には、とりわけ視線に呼びかけてくるものがある。それらは一層目立ち、支配的である。（……）これらが、私たちが最初に観察する対象なのである。」（『論理学』第一部第二章、F. p. 375L–375R, J. p. 39）。自然を先入見なしに観察する者に対して「支配的」な秩序は自ずと明らかになるとコンディヤック自身が語っていたように思われる。

(12) 復元されるものは「言説」の形をとるから、「読むものを提供したのである」とした方が自然に感じられたかもしれない。

(13) 本節注10を参照のこと。

(14)『論理学』におけるコンディヤックも唯名論的な立場をとっていた。これについては本論文第 II 節の注13を参照されたい。2. で第二の神話として検討される立場では、名称は症状の特定の集合を指示し、名称の成り立ちはその集合の成り立ちと厳密な対応関係をもつ。コンディヤックにおいても、私たちが類や種と見なす集合は「私たちとの関係やものごと同士の関係」(F. p. 402L, J. p. 157) に根拠を置いており、そうした類や種の名称の成り立ちはやはり集合の成り立ちに対応するといえるであろう。

(15) フーコーは次いで (F. p. 121–, J. p. 170– [p. 207–])、認識論上の神話の 4 番目として「一瞥 coup d'oeil」の神話を挙げる。臨床医学のまなざしはまったく感覚的であると考えられたが、さらに一部の論者は、医師は「感官の修練」の「結果」として、「一瞥」の能力、いわば「勘 tact」のようなものを獲得すると考えた。それはまなざし同様、「確率の領域と現実の言語的構造」を取り込んでいるであろう。しかし、この神話は、それまでのまなざしとその下での神話化に対しては、「非神話化するもの démystificateur」として働く。フーコーは比喩的表現――「新たなイメージ nouvelle image」――でこの一瞥を描き出そうとしている。一瞥はもはや、まなざしのように場を俯瞰したりはしない。それは非言語的で、事物をいわば貫通し、事物の奥を見通そうとする。秘密や、起源の神秘を隠している不透明な塊を探索する…… かくして、それまでの症状の医学は衰退し、器官や病巣や原因の医学が現れる。つまり、病理解剖学によって秩序立てられた臨床医学である。こうして、フーコーによれば「ビシャの時代」が到来するのである。

IV.

(1) ビシャ。Marie François Xavier Bichat (1771–1802). フランスの解剖学者・生理学者。フーコーがまず論じるのはビシャの次の著作である。M. F. X. Bichat, *Traité des membranes en général et de diverses membranes en particulier*〔膜組織一般と個別の膜組織を論ず〕, 1799.

(2) ブルセ François Joseph Victor Broussais (1772–1838). フランスの医師。熱病の実際の病原が知られない中で、熱病を「刺激因子に対する生体の反応」と見なした。

(3) F. J. V. Broussais, *Examen de la doctrine médicale généralement adoptée, et des systèmes modernes de nosologie*〔広く採用された医学理論、および疾病分類学の現代的体系の検討〕, 1816.

(4) フーコーは先に (本論文 p. 11)、「病気の存在 l'être pathologique (l'être de la maladie とも表記される)」とは、「諸症状」として「現存」する「病気の構造」であるとしていた。こうした「病気の存在 l'être de la maladie」とブルセの出現との関係については次のように語られる。「ここにおいて (……) 病気の存在が消滅する。刺激因子に対する器官の反応である病理現象は、もはやこれまでの世界に属することはできない。これまでの世界において病気は、その独自の構造において、ある絶対的な類型に従って実在することだろう。(……)〔ところが〕今や病気は、ある刺激原因 cause irritante に反応する諸組織の、ある複雑な運動にすぎない。これが病理的なものの本質のすべてである。なぜなら、もはや本質的な病気のあれこれも、病気の本質のあれこれもなくなったからである」(F. p. 194, J. p. 255–256 [p. 311–312])。

(5) フーコーは、『臨床医学の誕生』の「結論」において、ビシャらによって医学的経験の中に死が取り込まれた意味について考察している。フーコーによれば、これを契機として個人についての科学としての医学が生まれた。そして、それまではただ否定的なものであった有限性 finitude の働きが逆転し、積極的なさまざまな力が有限性に付与されるに至ったという。こうして19世紀の思想に特徴的な人間学的構造が現れるとされる。こうした考えは『言葉と物』において本格的に展開されるが、『言葉と物』では、この人間学的思想も、結局、その限界があらわになってきているとされる。筆者は、フーコーがコンディヤックをどのように位置づけたかについて補強するため、機会を改めて、コンディヤックが著作を残したいくつかの分野における、その後の思想の展開についてのフーコーの考え方を検討する予定でいる。その際には、必要な範囲で、上に述べたような、19世紀以降の時代の思想の全般的な性格についてのフーコーの考え方も検討したい。

むすび

(1) 以下を参照のこと。松永澄夫「経験主義――方法から主題へ」、『哲学の歴史』第 6 巻、中央公論新社、2007。村松正隆「観念学派とその周辺」、同上、p. 588。

(2) 山口裕之は『コンディヤックの思想』（勁草書房、2002）において、特にコンディヤックのラヴォワジエへの深い影響を指摘している。
(3) 拙論「コンディヤックの動的人間観――欲求の理論とその展開」（名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第33巻第２号、2012）を参照のこと。

参考文献

＊本論文に関係するものに限定して掲げる。

コンディヤック Condillac, Etienne Bonnot de
Oeuvres philosophiques de Condillac, éd. Georges Le Roy, P.U.F., 1948, t. I–IV（ルロワ編『コンディヤック哲学著作集』）
Tome I : *Essai sur l'origine des connaissances humaines*〔人間知識起源論〕（1746）（邦訳『人間認識起源論』、古茂田宏訳、岩波文庫、1994）
Tome II : *La Logique, ou les premiers développements de l'art de penser*〔論理学――考える技術の初歩〕（1780）（邦訳、山口裕之訳、講談社学術文庫、2016）
Tome II : *La Langue des calculs*〔計算の言語〕（1798）（死後出版）

カバニス Cabanis, Pierre-Jean-Georges
Oeuvres complètes de Cabanis, Bossange frères, 1823–1825, t. I–V (Facsim. reprint, Hachette)（『カバニス全集』）
Tome I : *Coup d'œil sur les révolutions et la réforme de la médecine*〔医学の変遷と改革についての瞥見〕(1804)

フーコー Foucault, Michel
Les mots et les choses, 1966（邦訳『言葉と物』渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、1974）
Naissance de la Clinique, 1963（邦訳『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳、みすず書房、1969）

コンディヤック研究
山口裕之『コンディヤックの思想――哲学と科学のはざまで』勁草書房、2002.
飯野和夫「コンディヤック『人知起源論』に見る真理探究の方法論」、名古屋大学言語文化部『特定研究シリーズ』第５巻、1995年３月
「デリダのコンディヤック論――『たわいなさの考古学』解題」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第28巻第１号、2006年10月
「デリダのコンディヤック読解――自同性の問題を中心に」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第30巻第２号、2009年３月
「コンディヤックの動的人間観――欲求の理論とその展開」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第33巻第２号、2012年３月
「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描――『人間知識起源論』の出版後間もない改訂に関連して」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第35巻第１号、2013年10月
「コンディヤックの記号概念――松永澄夫氏のコンディヤック関係に論文によせて」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第36巻第２号、2015年３月
「コンディヤックの自由論」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第38巻第２号、2017年３月

キーワード：フーコー、コンディヤック、臨床医学

Résumé

Condillac dans la *Naissance de la clinique* (1963) de Michel Foucault

IINO, Kazuo

Dans cet ouvrage, Foucault étudie les premières phases de la clinique naissante à la fin du XVIIIe siècle, en Europe et surtout en France. La clinique, explique-t-il, s'est développée en suivant la méthode d'« analyse » de Condillac. Il considère en effet que cette méthode a servi de « modèle épistémologique à la clinique ». Les cliniciens avaient la conviction d'être en mesure de restaurer avec précision les choses. Leur regard observateur analyse et reconstitue leur objet: la maladie. Cette méthode n'a jamais varié, mais le système de signes qui la soutenait a évolué. En effet, les cliniciens, après avoir essayé la « logique de calcul », sont parvenus à une « transcription syntactique » des choses. Tel était le cas de Cabanis. Ils ont ensuite atteint ce qui peut être appelé un « modèle chimique ». Par la suite, la clinique, en passant par Bichat, devient chez Broussais une médecine des « réactions pathologiques ». Ainsi, la clinique inspirée par Condillac fonde les regards de la médecine moderne. Pour Condillac, l'homme peut toujours être analysé et n'est jamais mythifié, alors que Kant revêt l'homme d'une forme de transcendance mythique. Ainsi Condillac, sans créer aucun mythe de l'homme, nous conduit à une vision empirique du monde.

Keywords: Foucault, Condillac, clinical medecine